

京都市帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十四卷 第一號

昭和十一年一月一日發行

新年特別號

恩給年金賞與の課税	法學博士 神戶正雄
經濟社會學の概念	文學博士 米田庄太郎
費用としての勢力	文學博士 高田保馬
幕末諸藩の開國思想	經濟學博士 本庄榮治郎
經濟學史の基本問題	經濟學博士 石川興二
產蘭處理問題	經濟學博士 八木芳之助
表式調査に就いて	經濟學博士 蜷川虎三
戰前戰後の獨逸社會事業	經濟學士 中川與之助
原料仕入に於ける基本問題	經濟學士 大塚一則
利潤論の修正	經濟學士 柴田敬
支那の幣制改革と其の意義	經濟學士 松岡孝兒
日本資本主義成立過程の一考察	經濟學士 堀江保藏
中立貨幣に於ける貨幣數量	經濟學士 中谷實
再保險の發展と保險企業結合	經濟學士 佐波宜平
都市と農村との對立に關するアダム・スミスの見解	經濟學士 白衫庄一郎
商業機能學說の發展	經濟學士 堀新一
臺灣の酒專賣	經濟學博士 汐見三郎
國民主義者の私企業觀	經濟學博士 作田莊一
殖民地再分配論の種々相に就て	法學博士 山本美越乃
貿易商品の集中性と分散性	經濟學博士 谷口吉彦
我が國の銀行預金	經濟學博士 小島昌太郎
新着外國經濟雜誌主要論題	

(禁 轉 載)

商業機能學說の發展

堀 新 一

一 商業機能學說の現段階

私は先に資本制生産の發展と商業の關係に就いて述べ、商業資本の機能を發展的に考察した¹⁾。然らばかゝる資本制生産發展の商業への關係は商業の機能に關して如何なるイデオロギーとなつて反映したか^{註一}。私の本論の目的はこの相關關係を研究するにある。

私思ふに、より未發達な段階はより發達せる段階の了解を待つて、始めてよくその本質その特異性を見出し得るものである。屢々云はれる如く資本主義的地代が知悉されてそこに貢賦十分の一税の本質が了解されるのである。思想に於てもその通りであつて、商業機能に關する學說もその現段階を了解して、それを關鍵として、初めて或はそれへの意義付として、段階として、より未發達な思想の本質が把握され得ることとなる。然らば商業機能學說の現段階は如何なる點にあるか。私は商業機能の現段階を物語るものとして、こゝにわが國に於ける卓越せる二人の商業學者谷口吉彦教授²⁾と向井鹿松教授³⁾の近著に就いて、この點を一瞥したいと思ふ。

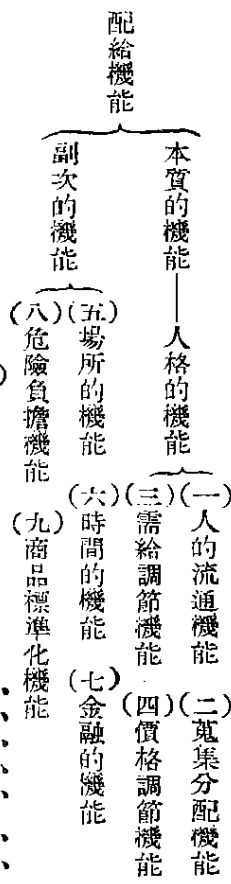
(一) 谷口教授に依れば(商業の本質的機能は(1)人的分離の克服にあり、屢々あげられる如く、場所的時間的分離の克服はその

1) 拙稿、資本制生産の發展と商業の關係(經濟論叢昭和十年十二月號)

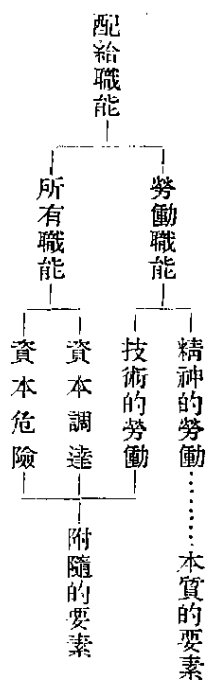
2) 谷口吉彦教授著、配給組織論(昭和十年九月) p. 66-90

3) 向井鹿松教授著、配給市場組織(昭和三年十一月) p. 159-295

副次的機能である。そして商品の社會的人格の流通といふこの本質的機能は(2)蒐集機能と分配機能との二つに分れる。これは又その商品の側より見れば、その(3)需給の調節適合作用となつて表はれ、更に價格現象を媒介とする所から(4)價格調節機能を作ふ。(2)副次的機能とは之を單獨に引離しては決して配給機能とならず、それら獨自の機能を構成するが、現實的には本質的機能と結合せるものであつて、教授は(5)場所的機能(6)時間的機能(7)金融的機能(8)危險負擔機能(9)商品標準化機能を擧ぐ。



(二) 向井教授に依れば配給上の機能は(一)需給の聯絡一致を期する精神的労働(本質的要素)と(二)具體的物財を或は分割蒐集し(物質の調節)或は選別等級付をなし(品質の調節)貯藏し(時間的調節)運搬する(場所的調節)技術的肉體的労働の二つを必要とするが、尙この外に配給はその附屬的要素として資本調達及び資本危險負擔の二要素を必要とすると。以上に述べた配給機能を圖示すれば、



私は先に述べたる如く、商業の本質的機能を商品流通の媒介に求め、精神労働説・商業即交換論の一種たる人格的分離克服説を共に採らないが、尙(1)時間的(2)場所的(3)量的(4)質的(5)價格的調節作用を認める點で、多くの學者と論を略等しうするとはいへ、こは寧ろ商業の抽象的本質的機能

4) 拙稿、前掲参照

能たる商品流通の媒介に必然伴ふものであり、それが具體化したものであると解し、副次的とか技術的とか附隨的とか見る考察を避け度いのである。特に斯の如き機能は抽象的羅列的に考察すべきものではなく、資本制生産の發展に即して考ふべきで、その時の社會形態に應じ、或機能が重要となり具體化し、或は然らざるを脱れないとするのであつて、この點多くの學者と論を異にする所である。蓋し學者多く商業の社會機能を云々するも、然もかゝる抽象的な「社會」の規定性は結局何物をも語る所以ではなく、重商主義者は商人階級への有用性—金銀の招來を以て、よくその社會機能を發揮する所以となし、重農主義者は農業への有用性即社會的機能觀を採つた。私は資本制社會に於ては商業の機能も再生産過程との關聯に於て、その過程に於て、把握するを最もよくその本質を把むものと考へるが、然らばかゝる商業機能は從來如何に考へられて來たか。これを當時の資本制生産の發展段階に即して、相關關係に於て把握せんとするが上述の如く本研究の目的である。

註一 思索と事實との關係に就いては我等は次の言葉を思ひ出す。『人間生活の形態についての思索従つてまたその科學的分析は一般に現實的發展とは反對の道を辿るものである。思索は後から従つて發達過程の既成の成果を以つて始める』

註二 向井教授は『賣買兩者が結合されて取引の意思が生ずる』ことを以て即ち精神的要素を以て配給職能の本質的要素と考へらる。私はこの説を否定する。寧ろ生産が欲望の對象を供給し取引意思を發生せしめ、販賣竝に支拂手段を規定するものと解したい。

二 重商主義の商業機能觀

- 5) 經濟を土臺と考へるものにとつても上層建築—精神文化例へば思想が土臺に働きかけること即ち交互作用の存在を否定するものではない。問題はその究局の規定性如何にあるのである。(大森學士、唯物史觀 P. 231以下)
- 6) Marx, Das Kapital, IB. S. 39.
- 1) 拙稿、前掲 2) A. Smith, Wealth of Nations, cannan Vol. I.p 398
- 3) Thomas Mun (1571-1641) England's Treasure by Foreign Trade, 1664 p.11.

(一)私は先に資本の先づ成立するは生産過程に先立つて流通過程に於てであり、商業資本の存在は資本制生産發生の前提をなすものなる事を論述した¹⁾。かく資本が流通過程に先づ成立せる事は、必然一國の富の増加又は利潤の成立を流過程程に於て求めんとする一の見解を生む。重金主義重商主義と云はれるものこれである。貨幣又は金銀は利潤の最も見易い形態として残る。從つてスミスも指摘せる如く²⁾、彼等は一國の富の増殖を貨幣又は金銀の中に見出し或は金銀の蓄積その輸出禁止を説き或は貿易差額の順調を説いた。^{註一}トマス・マン(Thomas Mun)は云ふ一國の富と貴金屬の保有量を増殖する道は外國貿易にあり吾人は毎年外國より購入消費するよりも以上に外國に賣却する原則を守らねばならぬと。ダヴナント(Charles D'Avanant)は云ふ貿易差額に於て利得者となる様に吾々は吾々自身の生産物を輸出せねばならぬこの生産物を以て吾々は吾々自身の消費に當るところのすべての外國製品を買ひその際吾々には餘利が貴金屬又は他國に讓渡することの出来る商品で残る即ち國民が貿易から得る利潤をなすところの餘利である⁴⁾。彼等の學説は重金主義(正貨輸出禁止)より取引平衡主義貿易平衡主義への發展を以て表はれた⁵⁾が、これは商業資本並に新興の工業資本の利害の變移の一代辯とも見る事ができ、その實踐の一反映とも見る事が出来るのである⁶⁾。かくて竹内博士がその本質と見る『近代國家の成立』⁷⁾が齎され、我等の第一に注目すべしとなす『資本制生産』への準備過程が齎されたのである⁸⁾。

註一 重商主義がスミスの考へた如く富を以て唯り金銀のみより成るものと考へしか否かは議論のある所であつて、高橋誠

Munにはスミスも引用せる如く外國貿易の作用を農業者の播種と收穫に比較した有するは名のかん思はる夫と終所
 投棄するは名のかん思はる夫と終所
 夫と終所
 有するは名のかん思はる夫と終所
 名のかん思はる夫と終所
 かん思はる夫と終所
 思はる夫と終所
 はる夫と終所
 夫と終所
 と終所
 終所
 所

一郎教授の如きは『凡そ如何なるマーカンチリストと雖も斷じて金銀を以て唯一の經濟財なりと想像するが如き事はなかり否なブリオニストと雖も、決して斯くの如き誤謬に陥れるものに非ず』と云ふ。

(二) 彼等に就いて先づ問題となるのはその利潤觀であらう。商業資本はその運動を $G-W-G'$ のもとに把握され得る。この場合 G' の $+$ 即ち起點と終點との貨幣の増殖が何處から來るかゞ問題でなければならぬ。然し當時商業資本のみの自由獨自の活動形態を目標した彼等は、先述の如く、當然皮相にも利潤は流過程に於て成立すると見たのであり『價值は進行しつゝある價值、進行しつゝある貨幣となり、また斯かるものとして資本となる。それは流通から來て更に流通に入り、流通の内部で自己を保存し、より大なるものとなつて、流通から復歸し、斯くして絶えず新に同一の循環を開始する。貨幣を生む貨幣を示すの G' こそ資本の最初の通譯者なるマーカンチリストに依つて與へられた資本の定義』¹⁰⁾となつたのである。かくて利潤は價值を超えての販賣即ち讓渡に基く利潤により説明された。然らばその價值は主觀價值か客觀價值かと云ふと當時は客觀價值説が支配的であつた事は注目すべきである。¹¹⁾後期重商學派と云はるペテイ (Petty) の如きヒューム (Hume) の如きロック (Locke) の如きスチュアート (Stuart) の如きカンチヨン (Cantilhon) の如きこれである。

今重商主義の殿將スチュアート (Sir James Stuart) を例にとる。彼は商品の價格を二つの部分に分ち、眞實の價值と讓渡に對する利潤とし眞實の價值(費用)は(1)一定期間に生産する商品の數量(2)職人の生活費及び必要經費(3)原料に基く價值を知悉せば與へられ得るとなし、これを越過せるものを製造業者の利潤として考へ、この利潤は相對的のもので一方に於ける利得は他方の損失であるとなしたが、これは重商主義の範疇を出でざるとはいへ、これに合理的表現を與へたる意味に於て、又重農主義への過渡的意味に於て、ペテイの學說と共に注目せらるべきであると思ふ。¹²⁾

- 4) Charles D'Avenant (1656-1714) An essay upon the probable methods of making a people gainers in the balance of trade, 1699. p. 46
 5) 竹内謙二著、貿易統制論 p. 1-30 6) A. Smith, W. of N. Vol I. p. 418 Vol II 141. 7) 竹内博士著、前掲 p. 8
 8) Charles Gide も亦古典派の貨幣を以て唯一眞實の財なりとマーカンチリストが信じたと見る見解を淺薄なりとし、マーカンチリストの目的は『國民的生

以上述べて来た所を以ても我等は重商主義者が商業即ち流通の過程に於て利潤が発生するものとなし、資本制生産の初期にふさはしい如く、金銀貨幣なる交換價値の形態に固執し、貨幣と資本とを混同した事を知る。¹³⁾

(三)重商主義は金銀貨幣の増殖を—金銀を以て唯一の經濟財と認めしか否かの問題は暫くおき—強調し、その源泉を商業の中に見出した必然の結果商業特に外國貿易を極めて有用なものと考え、國家は—特に金銀の鑛山をもたない様な國は貿易を保護しその順調に注意を拂ふべきを主張す。然し彼等に依れば、國內商業は一方に失ふ所を他方に得るのであり、何等富の増殖には貢獻せない。外國貿易にその力をより注がるべきであると考へたのであつて、國內商業はスミスの反對論¹⁴⁾でも知らるゝ如く極めて多くの拘束を受けた。スミスは云ふ。

England's Treasure in Foreign Trade なるマン氏の著書の表題は實に英國のみならず又他のあらゆる商業國の經濟政策の根本原則となつた。内地即ち内國商業は、凡ゆる商業の中最も重要な商業は同一の資本が最大の所得を與へ國民に最も多大の仕事をつくり出してくれる商業は、單に外國貿易の從物と看做された。内國商業は國內に外貨を持來るものに非ず又何等是を自國外に轉去るものに非ずと云はれた。故に國は内國商業に依り—内國商業の盛衰が間接に外國貿易の状態に影響せざる限り—より富みも或はより貧しくもなり得ないとされた。¹⁵⁾

然し一面ペテイがアイルランドの未發達の所以を論じて解するに國內商業存せず勞働への刺戟なき故なりとし奢侈を生ぜしめるを可とせるは注目すべきである。¹⁶⁾

要するに重商主義は商業を有用なものとして考へた。勿論國民國家の名に於て。然しそれは結局誰

産を創設するにあり』と見た (Charles Gide, *Principe d'Économie Politique* 1931) p. 387 9) 高橋誠一郎著、經濟學前史(改造社) p. 535

¹⁰⁾ Marx, a. a. O. S. 112. ¹¹⁾ 高橋教授著、前掲 p. 65。

¹²⁾ Sir James Stuart (1712-178), *An Inquiry into the Principle of Political Economy* 1767, p. 181, 182. Stuart の眞實價値が單に費用を指すか費用剩餘を含むかは議論のある所である。(例へばクノー)

にとつて有用なものだつたらうか。我等は再びミスに聞く、重商主義の案出者は商人及製造業者である消費者の利益は製造業者の利益のため犠牲に供せられて来た¹⁷⁾。重商主義は利潤を販賣にもとづいて生ずるものであると考へた結果商業の機能を専ら致富の手段として見出し特に相對的利潤論のため外國貿易を重要視し専らこの見地よりその機能の重要性を説いた。¹⁸⁾ マンガ貿易により貨幣の蓄積を得るも、之を以て更に貿易を行はざれば、再び之を喪失するに至るべしと云へる所を以ても我等はこの事情を知るのである。こゝに彼等の商業機能觀がある。

三 重農主義の商業機能觀

(一) 重農主義は周知の如く農業を生産的の商工業を不生産的となし、後者は之を輕視せる如く一般的に考へらる。¹¹⁾ 私の吟味は果してこの一般的考へ方が是認せらるべきや否やに出發する。思ふに今日の發展せる商業機能學說の多くが、既に重商主義學者の思想の中にその萌芽を見出し得るのである。今チュルギーとケネーを中心として考察する。

商業本質觀 チュルギー (Jungo) に依れば、土地が均等に全住民の間に分割され、其所で各人が自己の生存に必要なものだけを持つとすれば交換すべき何物も持たず、必然商業は起り得ない。¹²⁾ 又若し貨幣即ち金銀の流通が無ければ蓄積並に分割は不可能であつて、商業の發展は極めて限定的であると。¹³⁾ これは後にマルクスが商業資本の存在條件として商品流通と貨幣流通を擧げてゐるのと對照して興味深い。¹⁴⁾ そして商業は取引地域の廣狹場所的定着不定着卸賣小賣等種々の標準により分類せられ得るが「すべての商人に共通なることは再販賣の爲めの購入」であるとする。商業が交換の媒介商品流通の媒介を本質的機能とする事實が、ここに把握されてゐると共に「元資」に對して「第一何等の勞働することなく資本を以て獲得し得る收入に

13) 勞働價值說の祖と云はるるウィリアムペツティであるへ勞働の生産性の順序を述べて海員、商人、手工業者、農夫の順に見てゐる。彼は辯護士、醫師(彼自身醫師の出)、役人等は不生産的で僧侶を最も甚だしとした、(Petty, Political Arithmetick 1699, p. 172-179)

14) A. Smith, W. of N. VII p. 25-45 15) A. Smith, W. of N. VI, p. 401.

16) W. Petty, The Political Anatomy of Ireland 1691 Chap. Xi p. 75)

等しい利潤を伴ひ、第二労働及び彼等の労働危険能力の價格をも齎すべきものである。斯かる回収及び斯かる必須不可缺の利潤の保證なくば、如何なる商人も商業を企圖せないのであらう』として商業は資本制社會に於ては必然商業資本の運動の過程として表はるべきを洞察してゐる。次に商業の時間的場所的價格的調節に對する彼の思想を見るに、

II 時間的調節

(1) 消費者販賣價格を成立せしめるのは常に消費者の欲望と能力である(ケネーもこの點を指摘す)「重要考察」

第六考察) 然し消費者は必ずしも收穫又は製作物完成の時に生産物又は製造品を求めたものではない。(2) 生産者 企業者は彼等の基金を其企業に再投入する爲に直に且規則的に回収せんと欲する。收穫に引き續いて直に耕土播種を行はねばならぬ。絶えずマニファクチュール労働者を雇つておき初の仕事が終わると新しい仕事にかゝり、消費されるに従つて新しく原料を補給せねばならぬ。計畫せられた企業の労働を中斷せば何等かの悪結果を生じない譯には行かぬ。欲する時にはいつでも再び雇傭するわけには行かぬ。(3) 商業の介入 企業はこの故に其收穫若しくは製作物の販賣に依つて其基金を極めて敏速に回収することに於て最も大なる利益を持つ。他方消費者は自己の必要とするものを欲する時欲する場所に見出すを利益とする。收穫の時に一年中の食糧品を買つておかねばならぬと云ふことは彼等にとつて甚だしく不便であらうと。商業の介入がその間の時間的要求の矛盾を克服するものであり、生産者は生産過程の中斷流通過程の迂遠化をまぬかれ、消費者は商人にその貯蔵を見出すとの考は後スミス、マルクスにより發展せしめられたが、その萌芽は殆んど完全な形でこゝに指摘されて居る。

III 量的調節

『日常消費物の中には長期間の費用のかゝる労働を要求し少数者若しくは限られたる地方の消費者では一マニファクチュールの製品でも賣切れない程の非常な大量生産でなくては企業利潤があらならない様な労働を要求するものが多い』が、商業はかゝる大量商品を小消費者に分割すると考へられてゐる。資本制生産の發展に伴ふ企業大規模化と消費の量的場所的分散との間に於ける矛盾はチュルゲーにより一工場工業の中に既に見出された。更に進んで彼は云ふ。

VI 場所的調節

又此等製造物の企業は其數必ず少く、お互に甚だ相離れて居り、その結果大多數の消費者の家宅から甚だしく遠離つて居る。彼のところから極めて遠い且つ相互に極めて相距つて居る場所に於てのみ蒐得せられ又は製造せられる多くの物を消費する地位にない程の極貧者は存しない(スミスと對照せよ)。自己の消費物件をそれを收穫し又は製造する者の手から直接に購入することに依つてのみ取得するものは此等物件の大部分は無くして濟ますか又は其生涯を旅行に費すであらうと。

V 價格調節

商人は自己の利益の見地より一定期間の賣上數量と價格とを推定するが、小賣人は自己の經驗により貿易商は取引店に依り、各地の需給關係價格等を知り従つてその投機を統制する、かく價の低い所より高い所へ商品を賣り價格の均一

- 17) A. Smith, W. of N. Vol II p. 160 Gide は當時の貨幣需要の必要を説いて(1)商工業の勃興に基く貨幣需要の必要(2)新設國家の財政上の必要を擧ぐ(Gide, ibid 1931, p. 387.)
- 18) Marx は重商主義の經濟觀を批判して云ふ「重商制度は其の粗糲なる實在論を以て當時に於けるほんとうの俗學的經濟學を形成したのである此派の實際的利害の前にペティ並に彼の後繼者によつての科學的分析の端緒は全

化を齎すと考へる。この事はケネーも既に云つて居る。曰はく、最一樣なる價格は商業國民の間に行はるゝ價格なるが故に輸入貿易の自由及び交易に依つて穀物は絶えず最一樣なる價格を有する。この商業は豊富なる所の餘剰を缺乏せる所へ交互に齎らして諸國民の收穫の年々の不平等をいつも均平するが、それは到る所としてつねに生産物及び價格を殆んど同一の水準に引戻す。されば種子を蒔くべき土地を有せざる商業國民は大耕地域を耕す國民と同じ程確實にそのパンを保證されてゐる。一國に於てこの價格に僅の利益あらば、そこに貨物は引寄せられ平等はしじゆう回復されると(原則十六)。

要するに例令生産に對する關係は間接的とはいへ、『不生産』階級が彼等により如何に有用視されたかは以上の考察の中でもこれを知る。又商業の機能に對する彼等の考察は今日の發展せる商業機能觀と極めて近いものがある事もわかる。この機能觀が如何にスムスに取入れられ發展せしめられたかは後に考察する所であるが、これはスムスの觀察と一脈相通するものあり、チュルゴ一のスミスへの影響を過大視するをいましめる論者と雖もこの點は一應認めねばなるまい。然し彼等の有用觀が往々農業者階級への有用に陥る事は注目すべきで、こゝに彼等の商業機能把握の一面性が現はれる特にこの點はケネーに於て顯著であり、ケネーは屢々生産物の高價の必要を説き商人の價格釣上機能を強調するが(重要考察第六考察)、その論據は外國貿易に有利であり農業を活氣づけ農業の純収益を増す爲めであり、これは結局政府收入賃銀を増し、社會一般の利益となると考へるが、農業の利益即社會の利益觀はこゝにも見られ又スムスも指摘せる如く、或は彼等は不生産階級の存在意義を『農民の注意力を奪ふことなく生産に従事せしめる』點に求め、或は自由貿易輸出貿易の獎勵を説く時、これは農産物の生産を刺戟するためなりとの根據に依るものなる

く背後に押しやられてしまつた。(marx, IIB. III. S. 316)

19) Mun, ibid, p. 42-44.

1) スミスは重農主義の商業有用の主張を認む (Smith, ibid Vol II p. 168)

2) Anne-Robert-Jacques Turgot, (1721-1781) Réflexions Sur la formation et la distribution des Richesses (永田譯、岩波 p. 21)

3) Turgot, 前掲 p. 88

4) Marx, IIB I. T S. 279.

を見る時、その有用性が那邊にあるかを知り得るのである。¹⁴⁾ 然らば何故彼等は一度把んだ商業機能観をかゝる偏面的觀察に陥れるの矛盾に陥つたか。

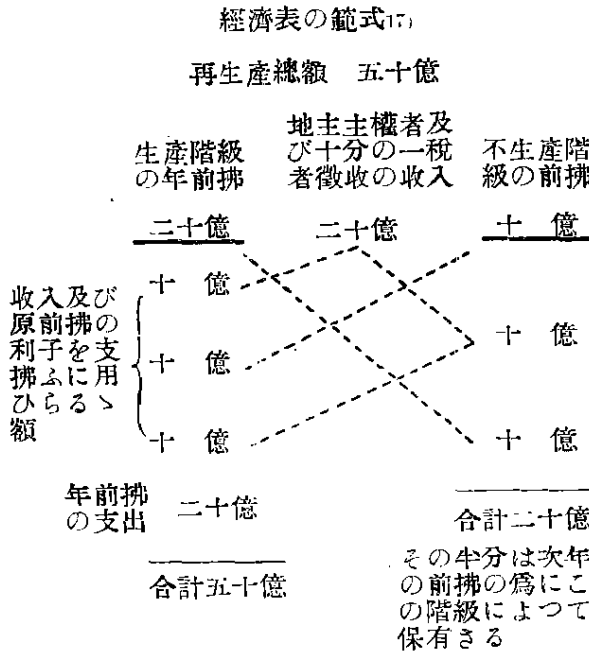
註 ケネー『國內農産物の外國貿易を毫も妨げざること。何となれば再生産は賣行に従ふからである』(ケネー農業國の經濟的統制の一般原則第十六)『農業の勞働及び支出に不利を招くを以て餘り製造業及び贅澤品商業に於いて貨幣及人の使用を擴大すべからざること』(原則第九)

(二)重商主義に於ては少くも形式的に見ざりし矛盾が重農主義に於て露骨に表れて來た所以は、私は之を當時の社會的歴史的地盤即ち資本制生産發展上の矛盾に關聯せしめ、その一反映として見る時最も之をよく了解し得ると思ふ。即ち當時資本主義社會は漸く封建制度を脱したばかりであり封建制度をたゞより多くブルジョア的に解して行こうとし、自らの固有の形體を未だ發見し得なかつた状態にあつたがこの客觀的地盤が彼等の思想に反映したものであるとも考へ得られるのである。これはスミス、マルクスも指摘せる如く外見上の土地所有の讚美も結論的にはその經濟的否認となつて居り、却つて資本制生産の確立の促進を認める結果になつてゐる―例へば地代への單一課税並に自由放任の主張に於て―事を見てもわかる。¹⁵⁾

この矛盾は又彼等の價值把握にも表はれ、彼等はいみじくも餘剩價値の源泉を流通過程より生産過程に移して考へたが、尙彼等によれば價值は一の使用價值であり、素材であり、この價值分析の不十分は、必然生産する所と消費する所の使用價値の差額の最も明白に表はれる農業を以て獨り生産的のもの―彼等に依れば純收益は『自然の賜』―と考へ例へば工業の如きへはその把握

5) Turgot, 前掲 p. 86. 6) Turgot, 前掲 p. 83, 84. Willbrandt はチユルソユーの賣買時間短縮に商業の本質的使命を見出した事を讀ふ。(Willbrandt, Einführung in die Volkswirtschaftslehre, 菅野譯, p. 76).
7) Turgot, 前掲 p. 83, 84. 8) Turgot, 前掲 p. 83. 9) Turgot, 前掲 p. 86. 10) François Quesnay (1694-1774), 農業國の經濟的統治の一般原則及びこの原則に就いての註釋、(增井譯、經濟表、岩波、p. 117)

が及ばなかつたのである。かくて彼等は商工業階級は何等の純収益を擧げるものではなく『或は地主から或は耕作者から其勞銀を受取り其勞働と交換に此勞銀と等價物を彼等に付與するに過ぎぬ』¹⁶⁾と考へる。尤も彼等が餘剩價值を純収益として把握し生産物は價值通りに賣られて尙費用以上の餘剩が存すと考へたことは『一方の利得は一方の損失』として之を相對的に見た重商主義に比し一段の進歩とも云へるが、而も尙往々彼等も『賣渡に基く利潤』の見解に陥るのである。こゝにも彼等の矛盾が表はれる。今これをかの社會的總資本の再生産の問題を必然的聯關に於て把握せんとし、文字の發明貨幣の發明と共に世界の三大發明と稱せらる『經濟表』に就て見る。



〔表の説明〕 百億の原前拂(年十億の消耗)と二十億の年前拂を以て農業を營む封鎖的經濟を前提とする。年産額は五十億。うち二十億は地代。生産階級及び地主階級の間で分配されるところの總額五十億は、年々同じ再生産を永久に保證する規則的秩序に於て年々支出されるが、地主階級から十億は買入れによつて生産階級へ十億は買入によつて不生産階級へ支出される。生産物三十億を他の二階級に賣つた生産階級は、それから収入の支拂の爲に二十億を返し不生産階級へ買入の支拂の爲に十億を支出する。かくて不生産階級はその勤勞者たちの生活の爲に、及びその工作物の原料の爲に生産階級から買入るゝに使ふ二十億を受取る、そして、生産階級は二十億の生産物を年々自ら支出するが、この二十億は年再生産五十億の支出即ち消費總額を補充するのである。これ即ち生産階級が年再生産五十億の支出總額に含まるる年前拂二十億の支出によつて、年々再生産されるところの五十億の支出の規則的秩序である。

11) Quesnay, Observations importantes (前掲 p.67. 68) スミスは製造品の價格を引上ぐる一切は農業を阻害すと考へた (W. fo N. Vol II p. 183, 184.)
 12) A. Smith, W. of N. Vol II p. 167.
 13) Charles Gide, Histoire des Doctrines économiques, p. 30-38.
 14) 國內の食料品及び商品の價格を毫も下落せしめざるに何となれば外國との相互貿易が國民に不利となるからである收入は賣上價值に従ふ夥多にし

〔表の批判〕 經濟表への批評は從來幾多の學者により種々の觀點からなされたが、その一切を今除外して、こゝでは不生産階級の生産物二十億に就いて問題とする。私の指摘せんとするのは彼等が『勤勞者たちの生活の爲に及びその工作物の原料の爲に』交換の對價として、この二十億を支出した後彼等自らの消費のための製品は何も残らないが、今この點は暫くをき、彼等の利潤も亦何も残らないわけである果してこれは何處から來るか、彼等は云ふ工業者階級は何等餘剩價值を生産せないと。然りとせばどうしても不生産階級の製品は價值以上の價格(貨幣)で賣るものと見ねばならぬわけである。然る限りこは重商主義の根本テーゼたる『販賣に基く利潤』に陥ることとなるのではあるまいか。若し然らずとせば工業に於ける餘剩價值の發生を(工業階級の生産性)を承認する事となる。こゝにも彼等の過渡期的歴史的社會的意義を反映する一の矛盾が横はる事となるのである。

要するに彼等は今日見る商業機能觀の基礎を確立した。然し彼等の存在の歴史的社會的意義よりして或はその機能を農業階級への關聯のみに限つてみ、結果としては商工階級擁護を導き或は重商主義の商業觀を批難しつゝその根本テーゼたる『販賣に基く利潤觀』に陥り、¹⁵⁾然らずとせば彼等の所説の拋棄の止むなきに至つてゐる事がわかるのである。

四 スミスの商業機能觀

(一) A・スミスの商業機能觀がチユルゴーの見解を受継いだと見らるべき點多きは既に私の指摘せる所である。然しそれは例令チユルゴーの發展に過ぎないとはいへ私は今日の商業機能學説は彼に依りほゞ確立されたものと見ても敢て過言ではあるまいと思ふ。以下その吟味にうつる。

工業本質觀 スミスもチユルゴーと同様大體商業の本質的機能を商品流通の媒介に於て認む。然し彼は往々更に廣義にこれを交換の意味に用ひ分業社會商品生産社會を商業社會と呼ぶ曰はく『人は己の勞働所産の中自己の消費に供して尙餘りある

て無價值なるは富ではない不足にして高價なるは貧窮である夥多にして高價なるが即ち富である(ケネー原則第十八)

Gideはこの句を商品に餘利を含んで價值通りに賣らるべしと主張せるもの(價格=價值=費用(農工商)+純生産物)と見る、(Gide, Histoire p. 18)

15) A. Smith, W. of N. Vol II p. 171, K. Marx, Mehrwert (マルクス全集、第八卷 p. 67, 68)

16) Turgot, 前掲 p. 36

餘分を他人の勞働所産の中己が必要とする様な部面と交換してその欲望の遙に大なる部分を充すかく各人悉く交換に依つて生活する即ち幾分か商人となる而してその社會そのものは正しく一個の商業社會と化するのである』とこゝに彼の商業發生の原因も示されてゐる。スミスに依れば國內商業は自國內の一地に購買し之を他の地に於て賣却するもので國內及び沿海貿易を含む。彼が卸賣商業の本質を運送(場所的調節)の中に小賣商業のそれを分配(量的時間的調節)——特に貧者への——の中に見出したのも彼を包む歴史的背景に照して見る時興味深い。

II 時量的調節 スミスは農業者をして穀物商を兼ねしめんとする法律に反對して云ふ。此法律は彼の資本を強いて二つの部分に分割せしめた。彼はその中の一部分しか耕作に使用するを得なかつた。然るに若も彼にしてその穀物を扱くや否や自由に一穀物商にその全收穫を賣却するを得ば、彼の全資本は即時にその土地に復歸し來つて、土地を更に改良し耕作する爲に一層多くの家畜を買ひ一層多くの使用人を傭ふに使役せられるであらう。然るに彼の穀物を餘儀なく小賣することに依り彼はその資本の大きな部分を一年中彼の穀倉鳩納屋に放下して置くことを餘儀なくされた。それ故その同一資本を以て左なくば彼の耕作し得べかりし所と同様によく耕作するを得なかつた。故に此法律は土地の改良を必然妨害したとして左なくばあり得たよりも穀物をより低廉ならしめる傾ある處か却つて是をより稀少ならしめ従つてより不廉ならしめる傾があつたに相違ないと。

III 量的調節 スミスは云ふ『若も資本にして原生産物又は製造された生産物の何れを問はず其或部分を之を必要とする様小口の部分に分割するに使用せらるゝに非れば各人は其の目前の用の必要とする以上に多量の財を購買するを餘儀なからしめられるであらう。例へば若も肉屋と云ふ様な商賣がないとすれば各人は一時に牡牛丸一頭又は羊丸一頭を購買する必要に迫らるゝであらうかくの如きは總じて富者にとつては不便であり貧者にとつては尙更一層不便であらう若も貧しい職人にして是非とも一時に一ヶ月若くは六ヶ月分の食糧品を購買せざる可からずとすればやむを得ず彼は今彼の貯への中自分の職業用具又は店に在る品物の形に於て資本として使用し而して彼に一所得を齎す大きな部分を彼の貯への中直接消費の爲めに取つて置かれ所得をも彼に齎さない其部分に向けるを餘儀なからしめられるであらう。それ故かくの如き人にとつては彼の生活資料を必要とする都度其日其日に否其時間時間にさへ購入し得ると云ふ事より外にそれ以上便利な事はない。是に依つて彼は彼の所得する殆んど全ての貯へを資本として投下し得る事となる即ち斯くして彼はそれらざる場合に比し一層大なる價值を有する仕事を提供し得而して彼が是に依り斯くして得る利潤は小賣商人が自己の利益を收めんが爲めに其販賣する商品に課する附加價格即ち一層高い價格を償つて尙大に餘りあるのである』と。

- 17) こゝには *Analyse du Tableau Économique* に於ける略表を用ふ。尙表に對する詳しい説明に就いては〔福田博士、流通經濟講話の附録及 p. 1-128〕参照。
- 18) *Profit upon alienations*
- 19) ケネーの外にも Marx の擧げてゐる英國の一重農主義者の所説の如き者も顯著(餘利價值學說史、前掲 p. 93)
- 1) A. Smith, W. of N. Vol I p. 24. 2) A. Smith, W. of N. Vol I p. 248.

以上スミスによる時間的量的調節作用を見るに WIGGINS の間に於ける兩要求の矛盾の克服を指摘し流通過程の短縮を擧げてゐるのは先づチュルゴの發展と見られ得るが、特に之を擴大再生産の關係に於て把握せるは注目すべきで資本制生産が既に一定の限度に進んで居た必然の結果でもあらう。これはチュルゴの思想には未だ確然とは現はれざる所でありスミスに次でマルクスに依り一段と發展せしめられた所である。

VI 場所的調節 スミスに依れば若も資本にして原生産物又は製造された生産物の孰れかをその潤澤なる所より缺乏せる所に輸送するに使用せられないならば右再生産物の孰れたるを問はずは生産される一地の消費に必要な以上には生産され得ない。商人の資本は一地の剩餘生産物を他地のそれと交換するものでかくして兩地の産業を奨励し兩地の享樂を増大せしむと。これはケネーがもし穀物その他の國內農産物の外國貿易を停めるなれば農業によつて人口を増大する代りに農業を人口の状態にて限ることとなる(原則第十六の註釋)と云へるに對比する事ができ共に場所的調節作用を強調したものである。スミスも亦外國貿易に就いてはその主たる利益は金銀の輸入に非ずして國內にて必要な餘剩生産物を國外に持出し需要あるものを國內に持來るに在りと考へてゐた様である。これは商業の投機機能に必然關聯する。

V 價格の調節 スミスは特に商業の投機的機能の及ぼす結果を強調し、これを穀物に就いて考へ、商人が介在せば若し穀物の不作を豫見せば價格を釣上げ消費を阻止し時間的場所的需給の調節を圖りかくして生産者は安んじて生産を續け消費者は消費生活を安定化するされば商人の介在は『缺乏不便の最良の緩和劑たるのみならず亦災厄の最良の豫防劑』であり、尤もこれは商人の個人的利害の考慮より行ふのであるが、その社會的利益は大きく商人の高める利潤を償つて餘ありと考へるそして彼はこの作用は當時まで人爲的制度により阻害されて來たと見る。こゝにスミスの國內商業助長放任論の根據が生れる。

以上のスミスの商業機能に對する考察を全般的に見る時第一に注目すべきはその把握が極めて全面的であり重商主義の如く商人階級重農主義の如く農民階級への利益を以てその機能を發揮する所以なりと見るが如き偏見に陥らざりしことである。第二に生産階級の外特に消費者への利害

3) A. Smith, W. of N. Vol II p. 83 4) Smith, W. of N. Vol I. p. 341 342
 5) A. Smith, W. of N. Vol I p. 341 ケネー經濟表(前掲 p.116)
 6) Smith, W. of N. Vol I p. 413 7) Smith, W. of N. Vol II p. 159.
 8) スミスは他の所で又曰く職人にとつてはその必要とする量を自ら醸造するよりも醸造人から買ふ方が概して一層利益多いであらう。若も彼にして貧しい職人であるならば醸造人から之を多量に買ふよりも小賣人から少々づ

を重んじた事でこれは『消費が總ての生産の只一つの目的であり眼目である』とせる彼の人生觀と照合して極めて興味ある所である。第三に彼が、右の例でもわかる如く、商業の分配機能をあげ『富者にとつては不便であり貧者にとつては尙更不便であらう若も貧しい職人にして』云々と云へる點で、尤も彼は他の場所でも屢々“Labouring Poor” (勞働貧民) に就いて述べてゐるが、こゝでもそれへの機能を強調せる點である。スミスがかゝる點に著目せるは勿論資本制生産が漸く彼時に確立し社會に多數の貧しい人々が表はれた事が『人生の幸福と完成』を念とせる彼の關心を呼んだのであらう。然し彼の調和的的人生觀と資本制生産の未發達は尙これ以上の分析に進むを得ず資本制生産のもとに於ける凡ゆる階級の調和的發展を説き且その可能を信じてゐた様に思はれる。これはマルクスが商業介在の必然性を専ら資本制生産の立場より論述せるに比して極めて興味ある所である。尙スミスは商業のかゝる機能は自由放任により最もよく發揮されると考へた。

(二)更にスミスの商業機能觀の研究に於て、見逃し難い二つの點がある。

I 内國商業の尊重 スミスの内國商業尊重の思想は各所に現はれ、内國商業を以て『凡ゆる商業の中最も重要な商業』と考へた。然らば如何なる論據から彼はそう考へたか。私は彼に於けるその主張の根據を次の點に求める事が出来ると思ふ。(1)内國商業に投じた資本は全然別個の國內の二個の資本を回轉する。蓋し商業が介在し國內の甲地で買ひ乙地で賣る時には『農業又は製造業に能く其資本投下を繼續せしめ』¹¹⁾『多大の仕事を作り出してくれる』¹²⁾が外國貿易に於てはこの利益は一方的であるに過ぎぬ。(2)内國商業の資本は消費外國貿易等に比し資本の回轉度が大で、報酬の到来が早くより多くの國內の勤勞に對して奨励及び支持を與へ『同一の資本が多大の所得を與へる』¹³⁾(3)輸出入される商品量は内國で生産消費される商品量に比し遙に少い。その結果内國商業の方が遙に生産消費に對する關係は深い。¹⁴⁾(4)内國商業はその投下資本が手許に近い故より安全である。これ

買ふ方が彼にとつて概して一層利益であらんと。(W. of N. p. 456) 或は曰と第六
はく勞働貧民 (Labouring Poor) は何物を買ふにも小賣と云ふ方法による
(W. of N. p. 223) Turgot の『貧者は存せぬ』(チネルゴ、省察、第
十六節)と對象し興味深い。
石川教授著、精神科學的經濟學の基礎問題 p. 251, 252

が彼の主張の論據であるが、彼によれば『資本額相等しければ内國商業に放下される資本は消費外國貿易に放下される資本よりも其國の勤勞に二十四倍大の奨勵及び支持を與へるであらう』¹⁶⁾と。スミスのかゝる主張は或意味では重商主義の一反動とも見られ得るが、その社會的歴史的意義としては、元來中世に於ては種々の障害より一特に重商主義時代は内國商業を壓迫した一内國商業は未發達であつたが資本制生産の發展と共に内國商業助長の急務がスミスの理論となつて表はれたものと見られる。但しこれは間接的生産助長の意味であつてスミスは直接の生産性の大きさは、農業製造業卸賣業小賣商業の順に於て考へた。

II 都市農村間の商業觀 重商主義は都會を尊重し重農主義は農村を尊重した。スミスは云ふこは棒を一方に曲げ過ぎる時是を眞直にする爲にはそれだけ他方に曲げたに過ぎぬ。¹⁵⁾ 都市農村間の商業により農村は都會に生存の手段及び製造業の原料を供給し都會は農村に製造品を供給しそしてその交易の利益は本來は相互的であり互惠的である。¹⁹⁾ 然しこれは從來の種々の人爲的障害により破られて來たのであると考へた。これは形式的には重農主義の農村偏重に對する一反動とも見られ得るが而もその反動は都市農村の分業の確立資本制生産の發展に伴ふ都市の意義の重要化する歴史的社會的地盤をもつた反動である。マルクスは云ふ『都會的の産業がそれ自身として農村的の産業から分離されるや否や前者の生産物は最初から商品となつてその販賣上に商業の媒介を必要とする事は事實の性質上當然である。その限りに於ては商業が都會の發達により他方また後者が前者に依つて制約されるは明かである』²⁰⁾と。然しスミスの調和的的人生觀と社會的地盤は彼をして都會と農村の利害相反搾取被搾取の必然性への發展の事實を未だ把握するに至らしめなかつた。スミスは進んで中世の商業に論及し國富論第三編第四章に『都市の商業は如何にして地方の改良に貢獻せしや』の一章を設け(1)都邑は田園の生産物への常設市場を提供し(2)商人は田園の土地を買込み之を改良し(3)その商業及製造業は漸次從前は其隣人と殆んど絶間なき戦争状態に在り其領主に對する殆んど不斷の奴隸的從屬状態に生活して居た住民の間に秩序と善政個人の自由と安全を齎した事に説き及び商業自由の彼の所説を基礎づける。²¹⁾

(三) スミスは商業の存在を社會的に有用なるものと考へた事は以上の如くであるが、進んで商業は價值又は餘剩價をも生産すると考へたか。一應スミスはこれを肯定するがその論據に於ては彼は尙重商主義と重農主義の間を徘徊する。重商主義は上述の如く價值一般を金銀なる價值形態に

10) Smith, W. of N. Vol I p. 401. 11) Smith W. of N. Vol I p. 348p.
12) Smith W. of N. Vol I p. 401 13) Smith W. of N. Vol I p. 348, 401.
14) Smith, W. of N. Vol II p. 36. 15) Smith, W. of N. Vol I p. 420.
16) Smith, W. of N. Vol. I p. 348.
17) Smith, W. of N. Vol I p. 343. 18) Smith, W. of N. Vol II p. 162.
19) Smith, W. of N. Vol I p. 356, Vol II p. 183, 184,

於て把握し重農主義は之を使用價値に解消したが、スミスは商品を價値と使用價値を併せ持つものとし兩派の誤を匡し且餘剩價値一般の把握に於てもその一面觀を解消した。生産労働の規定に於ても生産的とは『消費額の全價値に更に利潤を合せて之を再生産』²²⁾することであり不生産労働とは資本に對してではなく直接に收入に對して交換される労働として規定す。然るにこゝに把握した彼の考察は往々價値を生産する労働或は商品を生産する労働を以て生産的なりとの考へに迷ひ込むのであつて曰はく農業者は元本を越えて純生産物を生産するから商工者よりもより生産的であるとか²³⁾商工業の労働は『特別の事物又は賣却し得る商品に固定化』²⁴⁾される故生産的であるとか主張する事により明に一面重農主義の謬見に陥ると共にかく固定せる或は貨幣に代へ得るものを生産的となす點に於て、マルクスも鋭く突いて居る如く、²⁵⁾重商主義の偏見にさへ陥つてゐるのである。實に『スミスは根本において重金主義と同一のことを云つてゐる。重金主義においてはたゞ貨幣即ち金と銀を作り出す労働が生産的であるのみ。スミスに於てはその買手に貨幣を生産する労働のみが生産的である。従つてスミスがたゞ總ての商品においてその被覆にも拘はらず貨幣性質を看取するに反して重金主義はこれをたゞ交換價値の獨立的存在である商品において看取するに過ぎない』⁶²⁾のである。

かくスミスが商業の機能を全面的に把握した^註この點は餘剩價値一般の把握と共に明に彼の一大功績ではあるが、勿論商品生産が支配的になつた一の必然的反映とはいへ、²⁷⁾生産労働を商品生産

スミスが都市農村間の商業を重じた事は彼が『各國民の商業の最大にして且最重要なる部門は都會住民と農村住民の間に行はれるそれである』と云へるを以ても之を知る。 ²⁰⁾ Marx, Das Kapital III B IT S. 283

- 21) Smith, W. of N. Vol I. p. 355, 356 22) Smith, Wof N. Vol I p. 322
 23) Smtih, W. of N. Vol II p. 173 24) Smith, Wof N. Vol II p. 173.
 25) Marx, Mehrwert (前掲 p. 277-307) 26) Marx, Mehrwert (前掲 p. 306)

労働と混同し商業を以て商品を生産するものであるとの見解に陥つたのである。

リカードも屢々マルクスの指摘せる如く利潤は價值以上の追加であるとの見解に陥る。²⁵⁾

註 スミスも屢々商業の機能中財貨輸送(場所的調節)を重要視してゐる様であるが、ヴァイルプラントは當初商業と運送が一手で行はれ、生産と消費が場所的に分離し、相互に他の需要を知らず商業の仲介を必要とする限りに於ては、以上の機能を商業の使命とするは歴史的に見れば正當な核心が存在して居ると云ふ(ヴァイルプラント、國民經濟史、菅野譯、七六頁)後にマルクスが輸送を以て商業の異種の機能と呼んで居るのと對照して(運送業の確立も一原因)歴史的背景に照し合せて面白い。私はよく學者が社會的背景を無視して、抽象的に何が本質的機能なるかを論議し、或は他の學史上の學說を批評するのを断じていさむべきなりと思ふ。尙ヴァイルプラントに於ては商業による不在商品の賣買(先物賣買、運送中の商品の賣買等)が強調されて居る(九六頁以下)。

五 マルクスの商業機能觀

(一) マルクスは價值或は餘剩價值は生産過程に於て付與せられ流通過程に於て實現されるべきものと考へる。そして商業資本はかゝる流通過程に於ける資本が特殊の資本家の手中に獨立化せるものである。産業資本の循環運動は $G-W \cdots P \cdots W'G'$ であるが商業資本の機能はこの場合生産者の商品資本を貨幣に轉化すること即ち $W'G'$ の中に見出されるのである $W'G$ は商業資本の介在により $G-W'G'$ の形態を採る即ち一の資本家に於ける $G-W$ は他の資本家の $W'G$ であるが商業資本の介在は $W'G'(G-W')$ の間に一の中間過程を設けるものである。そしてこの中間過程の存在は資本制再生産の過程上必然的要求に立つものである。¹⁾ 今 $W'G'$ の過程を採つて見る。流通過程

27) Marx, Mehrwert (前掲 p. 284 307) marx は云ふブルジョア的富の最も元
素的の形態である『生産的労働』が商品を生産する労働であると説明するところの立場より
從つて生産労働が資本を生産する労働であると説明するところの立場より
すつと元素的な立場に相應すると(剩餘價值學說史第一卷 前掲 p. 302)
27) Marx, Mehrwert (剩餘價值學說史第二卷前掲 p. 198, 199) Marx によれば
リカードは利潤と剩餘價值を區別せなかつたがこの結果利潤は商品の價

は元來價值を付與するものではない否寧ろその長引くことは生産上の障害となる。生産者は資本の迅速の回轉を欲する。然るに商人が介在する事により生産者は商品を商人に賣渡して直ちに再生産に着手することが出来る。かくて生産過程の中絶或は生産規模の縮小はまぬがれる。一方消費者は商人に貯藏を見出す。こゝにW-G-G-W間の時間的要求の矛盾は克服さる。これは時間的調節の一例であるがマルクスは例令斷片的であるとはいへ各所でその量的質的場所的調節作用をも認む。然し彼は又一面W-G-G-Wの分離により資本制生産の根本的矛盾は何等除かるものでない却つて擬制的需要が作られ恐慌への一原因を作る事さへ認めてゐる。商業の調節作用は單に流通過程に止まる。

(二) 商業資本の機能は上述の如く産業資本の機能の特殊化したものに過ぎないが、然らばその獨立化の根據はどこにあるか。

マルクスに依れば、商業資本がその必要な割合を越過せぬれば(1)購買及び販賣にのみ充用される資本は産業資本家が商人的營業部分の全體を自身で經營せねばならぬに比し分業の結果ヨリ小となる(2)商人が専らこの營業に従事する様になる結果單に生産者の商品がヨリ速に貨幣化されるのみでなくまた商品資本そのものが生産者の手でなされる場合に比してヨリ速に轉形をなし遂げる故に産業資本家自ら配給を行ふに比し利潤率は増大する(3)商業資本總體を産業資本に比較して考へる時商業資本の一回轉は單に一の生産部面に於ける諸資本の回轉を代表し得るのみでなく尙又相異つた生産部面に於ける諸多の資本の回轉をも代表し得る。かくて一つの生産部門の生産期間のみならず異なる生産部面の生産期間による回轉上の制限をも打破し『商業資本が貨幣資本たる資格を以て商品資本に對して盡す機能は貨幣一般が一の與へられたる期間に行はれる何回もの流通に依り諸商品に對して盡す機能と同じもの』³⁾となるのである。

かくて『商人なるものは力の無用な消費を減少せしめ又は生産期間の遊離を助ける一機械』¹⁾とも見看す事が出来るがさればと

値以上の單なる追加であるとの俗見に陥る、彼が固定資本の方が大である等の資本の利潤の決定について云爲する時さうであると。(Ricardo, Political Economy, Chap I. 參照)

- 1) Marx, Das Kapital III. B. I T. S. 224-236 河上博士、社會問題研究、第七十二冊
- 2) Marx, Das Kapital IIB S. p. 102 谷口教授、資本主義經濟組織下に於ける商業の一機能に就いて(經濟論叢二十卷六號)

てそれが餘剰價値の生産に對する關係は飽迄も間接的なものであり價値或は餘剰價値を直接生産するものではなくその實現を助くるものたるに變りはない。然し流通過程も亦産業資本の再生産上の一段階であるからその資本は同じく平均利潤の分配に預らねばならぬ。この利潤はどこから來るか。商業資本は何等の餘剰價値をも直接造り出さない。賣渡にもとづく利潤も否定される。マルクスは産業資本家は商業資本家はその生産物を價値以下即ち半價で賣渡する(5)引渡し商人は未だ實現されて居ない餘剰價値を實現する即ち商人の販賣價格が購買價格を越過するのは前者が全價値以上に出づる結果ではなく寧ろ後者が全價値以下に止まる結果であると考へた(6)。

(三)以上がマルクスの商業觀である。マルクスは商業資本の本質的機能を商品流通の媒介販賣の爲の購買に限り入庫・發荷・輸送・部分け・配達等は之に伴ふ異種的機能と呼んで居る。然し彼も先述の如くチュルギーにより説へられスミスの發展せしめた商業の時間的場所的量的質的調節機能を決して見逃したわけではなく、たゞ彼の時代既にこれ等は特殊營業の營む所となつたから敢てこれを強調しなかつたのであらう。マルクスはかく商業の存在を必要と考へたが、然し重商主義が商人階級のため重農主義が農業階級のためスミスが生産者特に消費者階級のため必要と考へたとは異り資本制生産上必然的なものと考へたのであり、ウンタマンの言を借れば『商人の機能は不生産的ではあるが、資本主義の下に於ける再生産の過程は斯様な不生産的機能をも含んでゐる。また斯様な不生産的機能をも必要とするものであるから従つて社會的に必要なもの』と考へたのである。かくマルクスは資本制生産の觀點より用不用を説いたのであるが然る限り資本制生産の發展に伴ひ有用なものが不用なものとなる事があるのは否定出來ない。既に商人排除の傾向はHilferdingにより説かれてゐる(7)。この點同じく商業不生産説を採り農業の重要性を強調した重農

3) Marx, Das Kapital II B II. S. 233. 4) Marx, Das Kapital II. S. 98
5) 今Kを費用價格Pを産業利潤hを商業利潤とせば商品の生産者價格(商人の購買價格)は $K+P$ その價値は $K+P+h$
6) Marx, Das Kapital, I B I. T. S. 236 255. 河上博士、社會問題研究、第六十六、六十七冊
7) Marx, Das Kapital III B. I T. S. 237
8) ウンタマン、マルクス經濟學、山川譯、白楊社 p. 303, 304.

學派がそれを一の自然法則永久法則と考へたのと大に趣を異にする所である。

マルクスがかく商業の機能を資本制再生産との關聯に於て考へ一定の段階に於ける機構を兎に角比較的合理的な姿に於て把む事が出來たのは勿論彼の價值一般の分析—抽象的社會的勞働への還元—の徹底によるものとはいへ、資本制生産が彼の時代に一定の成熟を見た歴史的社會的背影に負ふ事多きも忘れてはならぬ。

然し資本主義は彼の後更に所謂その内的必然的法則に従つて發展した。資本制生産の獨占化は漸次商業の存在意義を弱める Hilferding は云ふ産業の發展は商業がマニユファクチュア時代に有して居た生産上の支配的地位からこれを段々追返す。しかもこの退却は決定的であつて金融資本の發展は商業を絕對的にも相對的にも壓縮しそしてかつて斯も驕慢なりし商人を化して金融資本の獨占する商業の一代理店たらしめると。思ふに商人排除の運動もかゝる社會的歴史的機構の變化の一表現である。¹¹⁾

六 結 論

以上私は資本制生産の發展に即してこれの商業への關係は商業機能に關する思想へ如何に反映したかを眺めて來た。以上を要約すれば次の如くである。

(一) 重商主義は粗雜なる實在論に出發し、價值と金銀なる價值形態とを混同し、金銀の増殖(9)なる實利的見地より、商業特に外國貿易を以て致富の手段と考へかゝる意味でその機能を重じた。然しそれは結局當時の支配的地位にあつた商業資本の代辯に過ぎなかつた。

(二) 重農主義は必ずしも一般に考へられる如く商業の機能を輕視せなかつた。今日見る商業機能

9) R. Hilferding, Das Finanzkapital 第三編、第十三章

10) 福本和夫著、經濟學批判のために(改造社) p. 91, 92.

11) R. Hilferding, a. a. O. S. 285.

學說の抱芽はほゞ彼等の中に見出し得。然し彼等は往々農業者への利益、即ち社會利益觀に陥つた。

蓋し價值分析の不十分—價值の實體の使用價值への解消の結果は最も表面的に見え易い農業を富の源泉と考へるは必然である。然し彼等が餘剩價值の成立を生産過程に於て見出した事は兎に角一の進歩であるが尙過渡期的存在—資本制生産の矛盾の歴史的意義を反映して或は往々重商主義の賣渡利潤說に陥り或は農業の必要を説いて結果から見れば却つて商工業の勃興を助けた。

(三) スミスの商業機能觀はほゞ今日我等の見るものに近い。特に彼は消費者階級への利益を重んじた。¹⁾ 彼は資本主義勃興時代を反映して調和的人生觀を持つた事は彼の把握の全面的である結果を齎したとはいへ更に一段の分析を妨げた。彼は都市農村の交易の利益は相互的であると考へた。彼は國內商業の重要性を説いた。彼は商品の價值を使用價值と交換價值の兩面より説いたが價值分析の不十分は商業労働の生産性の問題で往々或は重商或は重農學派の見地に迷ひ込んだ。

(四) マルクスは商業の機能を資本の再生産の過程に於て把握した。彼は商業の本質的機能を生産過程に於て付與された餘剩價值の實現—商品流通の媒介にありと考へた。彼は商業資本の介在は流通時間を短縮し流通空費を除き機能的生産資本を増大し間接的に利潤を増大せしめる故資本制生産上必然的のものと考へた。然し彼はその機能は資本制生産の發展に伴ひ變化するものとしたが、この點その存在を自然法則と考へた以前の學說と異なる點である。商業排除の傾向は *Hilferding* がその後彼の學說の基礎に立つて發展せしめた。(十一月十五日)

1) Smith は重商主義を批難して云ふ重商主義に於ては消費者の利益は殆んど恒常的に生産者の利益の爲めに犠牲にされてゐる、而して重商主義は消費に非で生産を以て凡て商工業の究極目標であり最終目的であると看做すの觀がある、(W.of N. Vol II. p. 159)